

福井支部ニュース

2025年度 第3号

日本科学者会議福井支部

連絡先：山本雅彦、masahiko@mbp.nifty.com

郵便振込口座番号 00710-9-17967 日本科学者会議福井支部

支部ホームページ <https://jsafukui.net/>

科学者会議本部 <http://www.jsa.gr.jp/>

今号の内容

- ◆追悼 山本富士夫代表幹事を悼む (畑 明郎)
- ◆追悼 山本富士夫さんとの思い出 (森 透)
- ◆追悼 山本富士夫先生の思い出(その1) (永井 二郎)
- ◆土竜時評 「焚書坑儒」の21世紀アメリカ社会 (土竜 百聞)

〔追悼〕山本富士夫代表幹事を悼む

JSA研究企画部長・滋賀支部代表幹事 畑 明郎

2025年7月10日に山本富士夫代表幹事が川崎市の病院においてがん
で亡くなられ、享年84歳でした。入院中の6月19日に最後の電話があり
ました。それによると、「5月下旬に福井市の病院で末期胃がんと診断さ
れ、肝臓と肺にも転移していたので、6月上旬に息子さんが務める川崎市の
病院に入院しました。病院長は「担当医師団をつくり、必ず治してみせる。
そして、がん部位を焼き尽くす化学療法を行う」と、山本さんに期待を持た
せましたが、それはかなわぬ夢となりました。

山本さんとは、2011年3月11日の福島原発事故後、原発立地県の福
井県と隣接県で近畿地方1500万人の飲料水源である琵琶湖を有する滋賀
県の関係から、脱原発びわこ集会和脱原発福井集会の連帯メッセージの交換
を通じて、親しくなりました。びわこ集会に来てもらって連帯あいさつをし
て頂き、私が福井集会で連帯あいさつをしたりし、集会が同日開催の場合は
メッセージ交換を毎年していました。

最近では、2024年8月24～25日に福井県敦賀市で開催されたJSA
第39回原子力発電問題全国シンポジウムでお会いし、2025年5月10
日に福井市で開催されたJSA福井支部総会の「PFAS汚染を考える」講
演会講師を務めました。その時の二次会で山本さんから「片方の耳が聞こえ
ない」とお聞きし、顔色も土色と良くなかったので、少し心配していまし
た。肝臓が悪くなると、顔色も悪くなるようです。その時には、まさか2か
月後に亡くなられるとは、夢にも思いませんでした。

私は数年前から全国幹事を務めており、山本幹事とは懇意にさせていた
きました。山本さんは正論実行型であり、私と気心が通じ、信頼していまし
た。JSAも人間の集まりですから、様々な問題が起こりましたが、その都
度、相談・助言を受けていました。とくに、昨年起こった編集委員会のハラ
スメント問題に対して第三者委員会を立ち上げたことや、最期の論文集とな
った『日本の科学者』6月号原発特集の企画・編集など、素晴らしかったの
で、亡くなられたことは残念でなりません。今後、山本さんに頼ることはで
きないので、生き残った者で対応していく覚悟です。

最後に、ご高齢にもかかわらず、孤軍奮闘された山本さんに敬意を表する
とともに、安らかに眠りになれることをお祈りする次第です。

合掌

[追悼] 山本富士夫さんとの思い出

福井支部代表幹事 森 透

福井支部の代表幹事であった山本富士夫さんが7月10日（木）に急逝された。直前まで、福井支部の幹事会に出席されていたにも関わらず、急に体調がすぐれず入院されたとお聞きした。体調がすぐれないにも関わらず、無理をして支部幹事会や全国の会議に参加されておられたのかもしれない。原発問題には多くの関係の会議があったと考えられるし、AALAの代表としての会合も多かったかもしれない。それらのもろもろの会合に無理をして参加されていたのかもしれない。ご自身の判断で参加をされておられたが、多くの社会運動に参加をする中で病気で死を迎えても本望であるという覚悟があったのかもしれない。壮絶な生き方であるとしかいいようがないという思いである。

私が今までの福井支部の活動で思い出すのは、今から30年ほど前の1996年8月に福井県河野村で開催された第22回全国の原発シンポジウム「『もんじゅ』事故と住民主権」が強烈な思い出としてある。山本先生が実行委員長で、それをサポートする立場で私は関わっていたと思う。2日間であったが、事前に会場の依頼に現地に出かけて準備をした記憶がある。全国から多くの方々が参加され、JSAから一定の距離をとっていた小木曾さんも参加され、夜の懇親会のあとに、私が福井市内のご自宅まで送った記憶がある。小木曾さんは共産党の原発政策に一定の批判的立場であったが、JSAの全国集会に参加してくれたことが非常に嬉しかった。

この集会を終えて、山本さんとはかなり親しくなったという思いがあった。その後、私は支部の事務局長を長くやったのであるが、私の支部運営に関して、かなりの注文をいただいた記憶がある。今から思えば残念である

が、山本さんとは難しい関係になったと思う。山本さんは頑固な方である。自分の考えをなかなか変えることはない。自分が正しいと考えることは貫き通す方であった。その生き方を最後まで貫かれたと考えるべきであろう。心より哀悼の誠をささげたい。



[訃報]

支部代表幹事 山本富士夫氏ご逝去

JSA 福井支部事務局長 山本雅彦からの訃報メール

JSA 福井支部会員のみな様

たいへん悲しいお知らせです。

7月10日の朝、当支部の山本富士夫代表幹事（福井大学名誉教授）がご逝去されました。

これまでの故人の、数々の功績を讃えるとともに、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

山本富士夫先生は、先月、胃ガンにより胃穿孔となり、激しい腹痛、吐き気、発熱などに襲われ受診。息子さんが住む東京に、ご家族ともども転居し、息子さんが務める医科大学病院に緊急入院されておられました。

福井支部事務局長 山本雅彦

[追悼] 山本富士夫先生の思い出（その1）

福井支部幹事 永井 二郎

JSA 福井支部代表幹事を務めておられた山本富士夫先生が、2025.7.10 に逝去されました。逝去されたことを初めて知ったのは、7.11 付けの福井支部幹事メンバーへの配信メールでした。6 月中旬に息子さんのいる関東の病院に入院されたことは人づてに聞いていたのですが、そのメールを見たときは「まさか・・・あの元気な山本先生がそんな早くに・・・」と呆然とし、入院中にお見舞いの言葉を届けることができなかったことを後悔し、5 月に最後にお会いした際の会話を思い出したり、昔の出来事を回想したりして、しばし体の動きが止まってしまいました。「本支部ニュースに、追悼文や思い出話などを」と打診頂きましたので、追悼の気持ちを込めて私個人の思い出話を複数回に分けて記したいと思います。

山本先生と初めてお会いしたのは忘れもしません、1993.4.1 に福井大学工学部機械工学科の助手として着任した 1～2 日後の夜のことでした。私が、机とイスと卓上ライトと電話機と書棚しかないガランとした教員室にいたところ、ノック音とともに「山本です。ちょっといいですか。」と先生が入って来られました。先生は、私の採用に直接関わった機械工学科教授でしたので、私の履歴書に目を通されていて、「履歴書に、趣味が卓球と囲碁と書いてありましたが、卓球は今もしているのですか？」といきなり聞かれました。大学学部時代に卓球部所属でしたが、学部 3 年で退部し、それ以降は全くしていない旨を伝えたのですが、有無をいわさぬ雰囲気にて数日後から昼休みに時々、学内にて卓球をご一緒することになりました（当時私は 26 歳、山本先生は 52 歳頃）。それがきっかけで、2000 年代以降、私は福井大学卓球部の監督をしばらく務めることになり、県卓球協会の理事も兼

務しました（いずれも現在は別の先生にバトンタッチ済み）。コロナ禍をきっかけに今は廃止されてしまいましたが、北陸 3 大学工学部スポーツ交換会というイベントがあり、年に 1 回、時期は 8 月、各種スポーツを通じて北陸 3 国立大学（富山・金沢・福井）の理工系教職員が交流を深めていました。私は山本先生に強く勧誘され、1994 年以降ほぼ毎年、卓球の競技に参加してきました。山本先生が現役教員であった 2000 年代中頃まで、福井大学の卓球チームは無敵状態でした。私は学生時代の卓球経験者であり、一般人と比べれば強い方のはずですが、福井大チームの中では下から 2～3 番目であり、山本先生を筆頭に私より強いメンバーが 3 人はいました。こういう懇親を目的とした卓球の場合、上級者はかなり手加減をするケースが多いのですが、山本先生は他大学の参加者に容赦なく強打を連発していました。手加減をすることは逆に相手に失礼でもあり、スポーツマンらしく山本先生の全力を尽くす姿が思い出されます。私は山本先生とダブルスを組むことも多く、山本先生におだてられながら実力以上に楽しむことができました。世界ベテラン卓球大会にて山本先生は上位入賞の常連者だったことは有名ですが、最近の話として、昨年 2024.9 に福井大学卓球部 OB 会が学内体育館で開催されました。まだ残暑の厳しい日で、私は数試合卓球を楽しんだあとは、本部席でぐったりしていましたが、山本先生は休憩もはさまずに、冷房の無い暑い午後に、確か連続で 4～5 試合楽しんでいました。本部席にて、OB 会事務局長の方と私は「あの年であのパワー、信じられない・・・」を連発していました。ついこの前まで、このようにお元気だったからこそ、今年病気で亡くなられたことが本当に信じられない想いです。心よりご冥福をお祈りいたします。（「その 2」へつづく）

〔土竜時評〕「焚書坑儒」の21世紀アメリカ社会

報道からからみるジャーナリズム時評（その7）

トランプ米大統領が世界を、そして米国内をも翻弄し続けている。WHOからの再離脱から始まり、今月開催の国連総会のパレスチナ代表団へのビザを発行せず入国禁止にした。国内では名門大学への圧力・攻撃からはじまり、疾病管理予防センターCDC長官を罷免し解体を公言、果ては日本の日銀に当たるFRBの長官を攻撃し就任1ヶ月の新任理事を解任するまでに至っている。「焚書坑儒」は司馬遷の「史記」が秦の始皇帝の暴君ぶりを指摘した記述だが、トランプ氏のこのような行動は現代の「坑儒」ではないか。ついに、労働統計が更新・発表した数字が「悪化」したのは反政府的・党派的だ、とその長官を指名解雇。統計データを改ざんするのは自国の状態が把握できなくなるので道義以前の問題で、たとえ「独裁国家」でも禁じ手だろう。オーウェルが『1984年』で描いたビッグ・ブラザーの国のようだ（日本政府はこの「先進」例かも：公文書改ざんの安倍政権は日銀総裁をすげ替え、経済統計のデータ項目を入れ替えて数値を「改善」、した）。

始皇帝の「焚書坑儒」について、評者はかつては彼を「暴君」としか思っていなかったが、兵馬俑の多数の俑がそれぞれに個性をもった顔で服装にも民族の特徴がある、などということを知って関心を持ち、いくつかの本を読んだりした¹⁾。そして、始皇帝は、焚書坑儒はしたかもしれないが、単なる「暴君」ではなく、紀元前3世紀末の中国を「統一」した、「征服」したのではない、という認識を持つようになった。評者が接してきた欧米の歴史本や小説では、「異民族」との闘いは基本「征服戦争」で、キリスト教などの宗教観もそれを後押ししていたように思う。18世紀のフランス革命でやっと、「自由」「平等」「博愛」などの言葉が「気ままに」などの古典的意味から新しい概念を付与され、現在も進化中である。コロンブスは15世紀末に「アメリカ大陸を発見」したときはカリブ海の諸島に上陸、当時の原住民の虐殺・奴隷化などを行ったそう。まさに「征服」である。17世紀のオーストラリアなどの英植民地でも、18世紀独立した米国でもそう。評者が学生時代に好きでよく観ていた西部劇は、「無法」なインディアンとの「自由」を求める闘いと征服の映画だった。アメリカ先住民は紀元前から生活を営んでいたが、英国からの移民・ピューリタンに「征服」されたのだ。

その後労働者不足を補うため征服したカリブ諸島やアフリカから大勢の奴隷を入れ、19世紀の南北戦争でリンカーンの北軍は黒人を動員するため一部奴隷を開放、戦後にやっと制度上は奴隷制廃止とした。黒人が法制度上「平等」になったのは20世紀後半で、意識上の差別は今でも激しいものがあるようだ。トランプ氏が南アフリカのラマポーザ大統領との会談で南アでの白人への「逆差別」を指弾・口撃したのは米国「建国」以来のしみついた意識が根底にあるためではないか。米国の「統一」は彼方にかすんでいる！？

21世紀の米国では、このような「坑儒」だけではなく「焚書」も激しいらしい。オーウェルの『1984年』が旧ソ連や中国などで発禁になったことがあるというのは知っていたが、最近読んだ本『絵本戦争』²⁾で、米国でもそれが禁止の州や学区があった、と「はじめに」に書いてあって驚いた。そして、新型コロナ禍後の2021年に現れたM4L(Moms for Liberty)の幼児や子ども向けの絵本までも「禁書運動」に仰天してしまった。同書にはその分野ごとに章を立てて「黒人」「LGBTQ」「女性」「障害」「ラティノーノ/ヒスパニック」「アジア系」「イスラム教徒」「アメリカ先住民」についての多数の禁書対象絵本を取り上げている。評者の子どもが小さいころ一緒によく見ていたTVの「セサミストリート」も様々な圧力を受けているとか。日本でも「はだしのゲン」が学校の図書室から消えたりしているが、米国でははるかに大規模に激しくなっているようだ³⁾。

評者は若いころ「自由」にあふれた米国に憧れたが、今の米国を動かしている底流にある17世紀ヨーロッパから進化していない様子は、非常に恐れる。しかし、日本も100年以上前から進化していない気がするが・・・。

（土竜 百聞）

- 1) たとえば、『人間・始皇帝』鶴間和幸 岩波新書 2015/9/19
『中華とは何か』松下健一 ちくま新書 2025/5/10
- 2) 『絵本戦争 禁書されるアメリカの未来』堂本かおる 太田出版 2025/2/2
- 3) <https://ja.wikipedia.org/wiki/2021年以降のアメリカ合衆国における禁書運動>

＜＜編集後記＞＞

2025年度支部ニュース第3号をお届けします。

急逝された山本富士夫氏への「追悼文」を寄せて頂いたので、お送りします。改めて、生前の山本富士夫氏の多面的な旺盛なご活躍を知りました。5/10の支部総会の講演講師の畑明郎氏との懇親会で一緒にしましたが、いつもの余裕綽々のご様子で全く気づくことができなかったのは、不明でした。改めてご冥福を祈ります。（OG.）